

弁護士の目で見る「映画評論」その4

弁護士 坂

和 章 平

「陪審映画あれこれ」

<裁判員制度の発表>

「平成の鬼平」の異名をとった中坊公平弁護士が委員をつとめる司法改革審議会における司法改革のテーマは、1)法曹人口の大幅増員2)法曹一元制の導入3)裁判の迅速化4)新しい法曹養成制度の創設、等と並び、5)司法への国民参加すなわち陪審制・参審制の導入である。審議会内部での陪審制論者と参審制論者との火花を散らす議論はマスコミを賑わせた（ex 平成一年一〇月一日 法の日 産経新聞「陪審制の復活は可能」）。そして本年三月に発表された「中間報告」では、独自の裁判員制度の骨格が発表された。

これは、1)選挙人名簿から無作為に選ばれた国民が裁判員となり、裁判官と同じ権限をもつ2)死刑、無期懲役などの重罪の刑事事件を対象とする3)裁判員は事件毎に選ばれる4)裁判官と一緒に有罪・無罪を決め、また量刑も判断する、という内容で陪審制よりも参審制に近いものだ。

評決は多数決で行われるため、裁判官と裁判員の比率をどうするか等、今後煮詰めるべき課題も多いが、司法への国民参加がいよいよ現実味を帯びてきたことは確かだ。

日本にも陪審制があり、一九二八年から一九四三年までの一五年間で計四八四件の陪審裁判が実施された。これは歴史的な事実で、多くの著書で紹介されているが、意外に国民には知られていない。その原因は、一九四五年の終戦直後は真剣に陪審制復活が議論されたにもかかわらず、日本の司法官僚の抵抗の中で次第にその力を弱め、いつの間にか職業裁判官オンリーの現行制度が唯一絶対の制度のように錯覚されたためだ。しかし日本にもれっきとした陪審制は存在したのである。

<「十二人の怒れる男」にみる陪審ドラマ>

陪審映画の名作中の名作は何と言っても「十二人の怒れる男」である。夏の暑い日、陪審員の指名を受けた一二名の男が一室に集まる。事件は少年の第一級殺人罪すなわち謀殺。裁判長は陪審員の義務を説示し、全員一致の評決を求める。六日間もの審理に立ち会ってくれた陪審員。早く結論を出してナイター観戦をしたい陪審員もいる。すぐに投票し結論を出そうとなった。もちろん全員一致での有罪の結論を確信して。ところが、一名の陪審員が「有罪」と挙手する中、ヘンリー・フォンダ扮する陪審員八号は無罪に手を挙げた。全員一齊に白い目で彼を見る。ここから長い長い陪審員の評議ドラマが始まった。陪審員八号の理性的で粘り強い説得の中、陪審員の議論は白熱する。論点は、

- 1)電車の轟音の中で証人が聞いた、少年の「殺してやる」との言葉の信憑性は？
- 2)通り過ぎる電車の窓越しに倒れる父親を目撃したという証言の信憑性は？
- 3)アパートのじいさんは、本当に殺しの一五秒後にベッドから起き上がりドアにかけよって、少年が階下へかけ下りて逃げ出すところを目撲したのか？
- 4)ナイフを使い馴れた人間なら、ナイフを低く構えて上へ突き上げる筈だ。そうであれば被害者の心臓のナイフの傷は？
- 5)目撃証人の鼻には傷跡があった。それは眼鏡の跡だ。すると目撃証人はベッドの中で眼鏡をかけて寝ていたのか？等々。

<日本映画の陪審ドラマ>

日本映画にも陪審モノがある。それは一九九一年に制作された「一二人の優しい日本人」。タイトルからわかるとおり「十二人の怒れる男」をベースにした日本人による陪審ドラマ。近時の陪審復活を求める運動の盛り上がりの中、「市民の司法参加を求めて－面白いぞ陪審！」といううたい文句で、最近上映された。主催は大阪弁護士会等。映画上映と同時に、ゲストを迎えての陪審トークも開催された。

事件は、別れた夫と口論のうえ、走ってくるトラックに夫を突き飛ばして殺害したという殺人罪。しかし、被害者は妻に暴力を振るってきた相当のワル。事件当日もさんざん暴力を振るわれ「ヨリを戻さないと殺す」とまで言われ、押し倒される寸前となった彼女は、生命に危険を感じ、とっさに力一杯旦那を突き飛ばした。するとちょうどそこに走ってきたトラックが彼をひいた。彼は即死。これなら正当防衛で彼女は無罪となる。

初顔合わせの陪審員は各自好きな飲み物を注文したうえ、「陪審ハンドブック」の朗読も省略し、まず有罪か無罪かの決をとることに決定する。そして「無罪だと思う人」の声に一二名全員が挙手。ホッとし、帰り支度をする陪審員。ところが・・・。二八歳の会社員である陪審員二号は、「いいんですか、こんなんで。もう一度集めて下さい。僕、話し合いたいんです」と言い始めた。そして出前の飲み物がきていないことを指摘する喫茶店店主の陪審員三号。そして陪審員二号は「僕は有罪に一票入れます」と爆弾発言。ここから本格的な陪審ドラマがはじまった。証人は、歩道をはみ出してほとんど車道に立って激しく口論していた男女を目撲している。さらに「死んじゃえ！」という彼女の言葉を聞いている。これをみれば殺意の立証は十分ではないか。陪審員二号は具体的に証拠をあげて有罪論を展開する。陪審員には女性も三名。各自各様に面白いキャラだ。理知的な五一歳の開業歯科医の陪審員九号は、終始、議論の整理役。そして豊川悦司扮する陪審員一一号は、本業は役者だが途中で「・・・弁護士なんだよ、俺」とハッタリをかましながら大きな役割を果たす。丁々発止の議論の中、陪審員の評決は、投票のたびに無罪と有罪が揺れ動く。最後に無罪の決め手になったのはピザの大きさ。陪審員は職権でピザの出前を注文した。そしてピザの大きさを確認してみれば、彼女は家に帰つて子供と二人で食べるためのピザを注文していたことは明らかだった。ならば、彼女には、元夫への殺意などなかったことは明らかではないか！長い長い議論の末、二号を除く陪審員は全員正当防衛が立証されたことを確信し、無罪に投票。自分も妻と離婚した経験のある陪審員二号は「夫を捨てるような女に同情はいらない。そんな女は刑務所にいて当然だと叫ぶが、「ここで裁かれているのは被告であり、あなたの奥さんではない」との一一号の言葉に絶句する。そして二号も遂に自己の良心に従い、無罪と評決する。

陪審員も人間である以上、さまざまに予断や偏見を持っている。その一二名の人間が、一人の少年の命を決定する評決を下す陪審ドラマは、必然的に人間性そのものを浮き彫りにし、息詰まる展開を見せる。まさに名作中の名作である。

<陪審映画にみる人種的偏見>

陪審制の本場であるアメリカは、人種問題という火種を抱えている。大西洋上では奴隸貿易が一五世紀後半から一九世紀後半まで約四〇〇年間続いたが、その中で一八三九年に発生した事件が「アミスタッド号の反乱」。そしてこれを描いたのが一九九八年作のスティーブン・スピルバーグ監督の「アミスタッド」だ。自由を求め反乱をおこしたアフリカ黒人奴隸は鎖につながれながら、裁判を受ける。その弁護人は、第六代アメリカ大統領を務め引退したジョン・クインシー・アダムズ。奴隸制・人身売買というあまりに重いテーマのため日本では大ヒットとはならなかつたものの、アダムズを演じた役者は、「羊たちの沈黙」の続作「ハンニバル」で、身も凍る人食い、ドクター・レクターを演じている、あのアンソニー・ホプキンスだ。ぐったりと疲れること請け合いの歴史的な裁判ドラマ。そして陪審員二号は「僕は有罪に一票入れます」と爆弾発言。ここから本格的な陪審ドラマがはじまった。証人は、歩道をはみ出してほとんど車道に立って激しく口論していた男女を目撲している。さらに「死んじゃえ！」という彼女の言葉を聞いている。これをみれば殺意の立証は十分ではないか。陪審員二号は具体的に証拠をあげて有罪論を展開する。陪審員には女性も三名。各自各様に面白いキャラだ。理知的な五一歳の開業歯科医の陪審員九号は、終始、議論の整理役。そして豊川悦司扮する陪審員一一号は、本業は役者だが途中で「・・・弁護士なんだよ、俺」とハッタリをかましながら大きな役割を果たす。丁々発止の議論の中、陪審員の評決は、投票のたびに無罪と有罪が揺れ動く。最後に無罪の決め手になったのはピザの大きさ。陪審員は職権でピザの出前を注文した。そしてピザの大きさを確認してみれば、彼女は家に帰つて子供と二人で食べるためのピザを注文していたことは明らかだった。ならば、彼女には、元夫への殺意などなかったことは明らかではないか！長い長い議論の末、二号を除く陪審員は全員正当防衛が立証されたことを確信し、無罪に投票。自分も妻と離婚した経験のある陪審員二号は「夫を捨てるような女に同情はいらない。そんな女は刑務所にいて当然だと叫ぶが、「ここで裁かれているのは被告であり、あなたの奥さんではない」との一一号の言葉に絶句する。そして二号も遂に自己の良心に従い、無罪と評決する。

陪審員も人間である以上、さまざまに予断や偏見を持っている。その一二名の人間が、一人の少年の命を決定する評決を下す陪審ドラマは、必然的に人間性そのものを浮き彫りにし、息詰まる展開を見せる。まさに名作中の名作である。

<陪審映画にみる人種的偏見>

陪審制の本場であるアメリカは、人種問題という火種を抱えている。大西洋上では奴隸貿易が一五世紀後半から一九世紀後半まで約四〇〇年間続いたが、その中で一八三九年に発生した事件が「アミスタッド号の反乱」。そしてこれを描いたのが一九九八年作のスティーブン・スピルバーグ監督の「アミスタッド」だ。自由を求め反乱をおこしたアフリカ黒人奴隸は鎖につながれながら、裁判を受ける。その弁護人は、第六代アメリカ大統領を務め引退したジョン・クインシー・アダムズ。奴隸制・人身売買というあまりに重いテーマのため日本では大ヒットとはならなかつたものの、アダムズを演じた役者は、「羊たちの沈黙」の続作「ハンニバル」で、身も凍る人食い、ドクター・レクターを演じている、あのアンソニー・ホプキンスだ。ぐったりと疲れること請け合いの歴史的な裁判ドラマ。そして陪審員二号は「僕は有罪に一票入れます」と爆弾発言。ここから本格的な陪審ドラマがはじまった。証人は、歩道をはみ出してほとんど車道に立って激しく口論していた男女を目撲している。さらに「死んじゃえ！」という彼女の言葉を聞いている。これをみれば殺意の立証は十分ではないか。陪審員二号は具体的に証拠をあげて有罪論を展開する。陪審員には女性も三名。各自各様に面白いキャラだ。理知的な五一歳の開業歯科医の陪審員九号は、終始、議論の整理役。そして豊川悦司扮する陪審員一一号は、本業は役者だが途中で「・・・弁護士なんだよ、俺」とハッタリをかましながら大きな役割を果たす。丁々発止の議論の中、陪審員の評決は、投票のたびに無罪と有罪が揺れ動く。最後に無罪の決め手になったのはピザの大きさ。陪審員は職権でピザの出前を注文した。そしてピザの大きさを確認してみれば、彼女は家に帰つて子供と二人で食べるためのピザを注文していたことは明らかだった。ならば、彼女には、元夫への殺意などなかったことは明らかではないか！長い長い議論の末、二号を除く陪審員は全員正当防衛が立証されたことを確信し、無罪に投票。自分も妻と離婚した経験のある陪審員二号は「夫を捨てるような女に同情はいらない。そんな女